

# GOOD WEDDING AWARD 2020 グランプリ&準グランプリ受賞者に聞く

全国のウェディングプランナーを元気づけ、結婚式の素晴らしさを社会に伝える目的で㈱リクルートマーケティングパートナーズ プライダル総研が開催している「GOOD WEDDING AWARD (以下GWA)」。今年は8月25日に最終審査が行なわれ、その模様はオンラインで生中継された。

本企画ではグランプリを受賞した藪田宏美さん、同じく準グランプリの芳賀恵理さんにインタビュー。その詳細を伺うとともに、受賞後の周囲の反応やご本人の今後の抱負までを語っていただいた。



藪田宏美さんは2017年にソウル賞を受賞。現在は東京・渋谷「ラグナヴェール アトリエ」副支配人として現場兼務のプランナーだ。今回GWAでグランプリとなった「GIFT - All for Thank you -」は、多くのカップルが望む「感謝を伝える結婚式をしたい」という、“ありがちなワード”に正面から向き合い、目の前のふたりにとって真の感謝とは何か？を深掘り。さらにチームで最大の形に創り上げたところが評価されての受賞となった。インタビューではこのウェディングを振り返っていただくとともに、藪田さんの接客信条などについても伺った。

<お話を伺った方>

## グランプリ受賞 藪田 宏美さん

(株)エスクリ ラグナヴェール アトリエ 副支配人

### 特別な「感謝」の伝え方はないかと意地になってプランニングした

——まずは受賞対象のウェディングの内容を伺いたいと思います。

藪田 新規から引き継いで、テーマウェディングをやらせたら社内でも指折りのプランナーが打ち合わせを担当するはずでしたが、おふたりは「ゲストに感謝を伝える結婚式にしたい。それ以上でも以下でもない。そもそも結婚式にテーマって必要なのでは？」というお考え。そこで急ぎ私が担当させていただくことになったのです。「感謝」という言葉は10組中9組が口にするものですが、最初にそれを大切に広げてテーマにする方向性は間違っていないと思いました。そこでおふたりにとっての「感謝」を掘り下げて、結婚式の素晴らしさを感じられ、「結婚式をしてよかった」と思ってもらえるプランニングをしようと決めたのです。“ありがた”と思われるからこそ、おふたりにとって特別なものに、もう意地になって絶対すごいものにしようと(笑)。

実際に話を伺ってみると、新婦とその親御さんが結婚式に対してあまり前向きではないと感じました。なぜだろうと深掘りしてみると、新婦の両親は結婚式を予定していたけれど出産のタイミングが重なって式をしなかった、と。楽しみにされていた結婚式を諦めた新婦のお母さま、そして娘の新婦の気持ちに寄り添えないかと考えてみると、ご家族にとって感謝は決してありません。特別な意味を持つ伝え方もあるはずだと感じて、新婦両親のセレモニーを企画・提案しました。

具体的にはファーストミートの場を設け、それに加えておふたりからのサプライズの贈り物として、新婦両親にバージンロードを歩いてもらおうというものです。

### ——提案してみて、新郎新婦の反応はいかがでしたか？

藪田 新婦は「そんなことできるんですか!？」と驚かしながらも、とても喜んでくれました。そこから新婦のモチベーションも上がってきたのです。

さらに、もっと親御さんに結婚式の価値を感じてもらえる策はないかと考えて、新婦からお母さまにオリジナルペールをプレゼントしてもらうことに。すると新婦は早速、手芸店に足を運び、店員さんにその話をしたところ感動のあまり涙ながらに品探しを手伝ってくれたそうです。常々お客さまには「準備も大切、当日以上に楽しんでください」と伝えているのは、そんなことがあるからなんです。

当日は、新婦がキラキラのビーズで「THANK YOU」と刺しゅうを入れたペールを「今まで本当にありがとう…」と伝えな



ファーストミート後に、新婦からお母さまにサプライズのギフトペールを贈った。(左)美容スタッフと相談して留袖姿のお母さまの髪にペールをコーディネート。(上)バージンロードの前で、あらためて娘(新婦)の感謝の思いを噛みしめる両親

らお母さまに贈呈。お母さまは大泣きで喜ばれて、その後のお父さまとのバージンロードもはにかみながらですが、うれしそうに歩かれていました。

### 想定した以上に美しいシーン スタッフ力を実感した瞬間

——両家のバランスを考えて、新郎の親御さんにもサプライズプレゼントを考えられたそうですね。

藪田 ええ、新婦やその親御さんばかりフィーチャーされがちですが、新郎やその親御さんにも新婦家と同じくらいの思いがあるはず。そこを引き出すようにしています。

そこで披露宴の中座退場でお母さまだけでなく、お父さまも呼び出して新郎と3人で退場する、その最初のシーンで「手紙を読むことで両親に感謝を伝えませんか？」と提案しました。最初は「えー俺が手紙書いて読むの？」という反応でしたが、おふたりそれぞれに感謝を伝えるシーンがあることで100%になるとお話しすると、「書いてみますよ」と言ってくださいました。そのかいあって、後になっても思い出深いシーンになったと思っています。

——ゲストへの感謝の伝え方では、ビジュアル的にも素晴らしい演出となったそうですね。

藪田 ゲストの皆さんにはどのように感謝を伝えようか？を打ち合わせていく中で、定番となっている席札の裏に一人ずつメッセージを書くのではなく、もっとふさわしい形があるのではないかと。そこでサービスキャプテンにアイデアをもらって考案したのが、席札の裏には何もなく、デザートタイムで思いを伝える方法でした。

実際には、照明を暗くしてMCからおふたりの感謝の言葉を紹介しつつ、デザートと共にグラスに入れた手紙を各卓にサーブしました。それもLED照明でランタン風にコーディネート。ゲストにとっては「席札裏にメッセージがないのは、きっとふたりも忙しかったんだな」と思わせておいて(笑)、コースの締めめに届いた光るグラスを見て「えっ!?何これ？」というサプライズです。当日は私もグラスレターをサーブするため現場に入っていたので、その瞬間は思い描いていた以上の美しいシーンになったなど興奮していました。

私一人では到底思いつけなかった手法ですが、せっかく同じ思いの仲間がいるのだから、「こんな時は無理せず仲間頼ろう」と、キャプテンを中心にしたスタッフに相談を持ちかけたのがよかったです。

最初はコースの中で手紙を皿の下に仕込んで出すから始めて、手紙が濡れてしまうなどの課題を検討していくうちに、「デザートと一緒にLEDを入れてランタンにして、美しく出したら？新郎新婦卓から見たら絶景だ

よ」とキャプテンが提案してくれたのです。その後も各ゲストのグラスレターをデザート提供後すぐに間違いなく提供できるよう、1卓ごと時計回りにトレンチにまとめてサーブできる仕組みまでを考えてくれました。

やはりお客さまの思いをしっかり描いていくためには、サービスなど店舗内スタッフが私たちプランナーと同じ温度感でその実現に動いてもらうことが必須です。今回もイレギュラーなことばかりでしたから、キャプテンを中心とした働きがなければ、受賞は到底おぼつかないと思います。

タイトルにした「All for Thank you」はもともと当社のプロデュースコンセプトで、普段から「ここはこうしたらもっといいシーンになるのでは？」などと、サービスやフラワー、音響・照明などのスタッフが「自分のお客さま」というプロ意識で関わってくれています。そのこともあってこの言葉を使いました。その意味から今回は、エスクリのチーム力が受賞したと思っています。



新郎からも両親にサプライズの感謝の演出を。胸ポケットから手紙を取り出すなど、細かな部分まで打ち合わせたそう

藪田 宏美  
Hiromi YABUTA

大阪観光専門学校を卒業後、神戸ポートピアホテルのプライダル部に配属。約6年半プランナーとして勤めた後、2017年㈱エスクリに入社。「アルマリアン(池袋)」の立ち上げに参加した後、「ラグナヴェールアトリエ(渋谷)」に異動し、19年10月に副支配人に就任。「GOOD WEDDING AWARD 2017」では「ソウル賞」を受賞。現在は一緒に結婚式を創る仲間はもちろん、自分自身に関わる方へ「ありがとう」をたくさん伝えることを心掛け「ENJOY WEDDING!」を合言葉に日々楽しみながら仕事をしている。



(左) 文中で紹介した「グラスレーター」。安全面まで考えてロウソクではなく温かい色合いを発色するLEDをセレクトした。(右) 新郎新婦からのサプライズメッセージを熱心に読むゲスト。パーティーの終盤にもう一度テンションを上げる演出を配置したのも見事だ



## 「誰よりもお客さまが大好き」 の気構えが成長を促してくれた

——受賞後、ご自身の中で何か気持ちの変化などはありましたか？

藪田 あらためて「やはりチーム力って大切だな」と身に染みて感じました。その日だけの言葉や行動だけでなく、日頃のチームワークの積み重ね、密なるコミュニケーションがベースにないと、いきなり「今回は大変なんです。助けてください」と言っても、スタッフにはなかなか伝わりません。

かくいう私は神戸のホテルでプランナーになった当初は、「経験より勝るものがある」を信条に突っ走ってきました(笑)。その考えを支える土台に「お客さまを大好きな気持ちは誰にも負けない」という自負があったからで、それは今でも変わりません。

結婚式っておふたりの人生のいろいろな重要キャストが並んでいる場です。そこに一番日が浅いプランナーの私が人生の節目の大事なポジションにいるという事実。たまたま巡り合わせたご縁ですが、私はそこに感謝しておふたりを一番好きである存在になろうと決めたのです。そして大好きであれば、いろいろなことをやってあげたいもの。どんなおふたりでも私が大好きであれば、その思いは必ず通じるし、最初はあまり打ち解けてくださらない方だとしてもむしろ余計に連絡を密にして「藪田さんってそういう人なんだ」と分かってもらう。その姿勢でプランナーとして13年間過ごしてきて、失敗したことは1度もありません。

——ところで神戸ポートピアホテルで活躍

されていたところから、エスクリに転職された理由は何でしょうか？

藪田 一定の活躍もして後輩に教える立場にもなった、しかしそもそもウエディング業界に入った理由であるゲストハウス企業に勤めてみたいという高校時代の夢の存在が大きかったです。20代も後半に差し掛かり、「もともとそこを目指して入って来たんだから、もう一度チャレンジしてみよう」との思いもありました。ちょうどエスクリが池袋に新店舗をオープンするというタイミング。「このチャンスを逃さない!」と思って応募し、結果的には神戸で最後の施行を終えた翌日には池袋の新店舗で働いていました(笑)。

——現在は副支配人という立場ですが、これまでとはまた違った視点で働かれているのでしょうか。

藪田 今回のウエディングにも関連しますが、やはりチームで運営に当たるのが結婚式ですから、スタッフに頼るべきところは頼ることを念頭に置いています。自分一人で頑張り過ぎない、信頼するスタッフを通じて大好きなお客さまと接することもできるのだと以前お世話になった上司に教えられたことも大きいですね。

それもまた幸せな生き方だなと思えたので、今は喜んで副支配人を務めさせてもらっていますし、自分が担当しなくてもチームで担当している、会場全体でおふたりを担当しているという意識ですね。また自分自身、決定権あるもう少し上の立場になれば、何かあった時にもメンバーを少しは守れるとも思っています。

——最後に今後の展望を伺います。

藪田 受賞の成否にかかわらず今回のウエディング自体、私からこれまで関わってくれた皆さんに伝える「感謝のメッセージ」でもありました。また、お客さまとスタッフ皆で作上げるウエディングが評価されたので、その点ではこれから社内のスタッフも自信をもって向き合えると思います。

業界全体でも“いい結婚式”が増えていけば、令和の時代にあらためて社会全体が「結婚式は必要なものだ」と、その価値や意義を感じてもらえるでしょう。そうなるよう、私も何らかの形で業界のお手伝いできればいいと考えています。



新郎新婦と藪田さんの記念ショット。「感謝」をありきたりのままに終わらせないプランニングも素晴らしかったが、それも新婦と親御さんの思いを引き出したヒアリングがあってこそ